

# 中国石獅とシナ海「向天眼」系靈獸像からみた肥前 狛犬 -シナ海石造獅子・狗犬文化圏の比較研究（2）-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川野, 明正 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19125">http://hdl.handle.net/10291/19125</a>

# 中国石獅とシナ海「向天眼」系 霊獣像からみた肥前狛犬

— シナ海石造獅子・狛犬文化圏の比較研究(2) —

川 野 明 正

## I. はじめに

肥前狛犬は佐賀県と長崎県・福岡県の一部に分布し、熊本県でもみられる小型の狛犬で、西村隆司氏の『多久市歴史民俗資料館開館三十周年記念特別企画展 — 多久市の肥前狛犬』の解説によれば、16世紀末から18世紀前半の約160年間に製作・奉納された狛犬である〔西村・多久市歴史民俗資料館2011:6〕。形態は他地の狛犬には希少な素朴かつ突出したもので、ずんぐりと体格に丸みを帯び、大きな頭と大きな両目をもち、「日本のムーミントロル」（長崎県在住の狛犬研究家竹原由樹子氏の言葉）や「鎮守の森の妖精」（日本石仏協会常任理事中野高通氏の言葉）とも形容される愛らしい姿を呈する〔中野2017〕。

志佐惲彦氏の『巖木町の肥前狛犬』では、肥前狛犬は以下のように概括される。「全体的に小形で静的で、弧線と直線を駆使して単純化し、あるいは誇張したりして大胆に造形されている」「前肢を立て、後肢を前へのした側面観は、円の四分の一の形に近く、正面から見る外形は長方形に近い。体の細部についても、天山神社（広瀬）や綿津見神社（杉宇土）のように四肢をそれぞれ独立して彫り出しているものもあるが、多くの狛犬が四肢と胸部の間はくり抜くことなくそのまま残して、四肢や胸部の形を浮彫的に彫り出し

ているごとく、細部の表現を大胆に省略している。このような極めて素朴な石造狛犬を〈肥前狛犬〉と称している」[志佐・巖木町教育委員会 1997: 3]。

肥前狛犬の形態上の特徴には、中国の石獅の伝統的な形態的要素がみられる。この点の論考は従来少ない。そこで本論は中国石獅の形態の特徴から、肥前狛犬の形態分析に利用しうる観点を提示する。

また、本論は中国石獅・石造靈獣像の中でも、特に中国南部からヴェトナムに掛けてのシナ海域の靈獣像を取り上げる。理由は肥前狛犬の形態的特徴にも通じる天向きの斜め上目線の上付き眼の大きな眼「向天眼」(漢語: XiangTianYan・シャンティエンイェン・こうてんがん)の特徴があるものが多いため(巻末地図参照)、本論では「〈向天眼〉系靈獣像」の概念を立てて論じる。肥前狛犬も地理上東シナ海域の靈獣像に属するが、中国南部のこの種の靈獣像とは、比較考察上対象化されておらず、東アジアにおける肥前狛犬の位置づけを考える試論としたい。なお本論は、拙著「閩南地方大陸側の石獅爺・風獅爺——東シナ海・南シナ海石造獅子・狗犬文化圏の比較研究(1)」に続き、研究課題「シナ海石造獅子・狗犬文化圏の比較研究」に属する[川野 2016]。

## II. 中国石獅からみた肥前狛犬の形態的特徴

### 1. 前足の羽毛「長毛」

肥前狛犬には、前足に突起部があるものがある。武雄市内の小祠の肥前狛犬の前足には、羽根状の毛並みの突起部があり(図 2-1)、佐賀市大田神社の肥前狛犬では、右側の狛犬(向かって左)の前足付け根に、弧形の突起部がある(図 2-2)。

これは中国では「長毛」(漢語: ChangMao・チャンマオ・ちょうもう)と呼ばれ、これがあるために獅子は疾走することができるとされる。

中国では東周時代(前 770-前 256)の前 6 世紀頃から青銅製の獅虎に似た

有翼靈獸がみられるが、前漢（前 202-後 8）では、渭陵（陝西省咸陽市渭城区）から 1972 年に出土した 2 個の獅虎像が最初期の代表的な有翼獅虎像として知られる（咸陽市博物館所蔵）。この前漢時代の有翼獅虎像は、後世の有翼獅子に先駆けた姿をもつ。中国ではこれを「辟邪」（漢語：BiXie・ピーシエ・ヘキジャ）と呼ぶ。

渭陵は、第 10 代の皇帝元帝こと劉爽（りゅうせき・前 74-前 33・在位前 48-前 33）の陵である。有翼獅虎像は、蹲踞型と匍匐型の 2 種があり、ともに白玉製である。蹲踞型は、全高：5.4 cm・全長：7 cm・136 g で、胸を反り、首をもたげて睨む。角が 2 本後ろ向きに立ち、両翼がある。

匍匐型は、全高：2.5 cm・全長：5.8 cm・重さ 49.3 g である。眼を怒らせ、歯を剥き出し、地面を這い、獠猛である。頭上に 2 本の角があり、両翼がある。蹲踞型も匍匐型も、前足付け根に長毛の線刻がある（図 2-3・4）。中国石獅から日本狛犬に脈々と継承される形態的特徴である長毛は、小型狛犬の類である肥前狛犬にも明確に継承される。

## 2. 横三段の胸と腿の表現

肥前狛犬には、胸を中央として、横三段に張り出した表現がみられる。横三段表現をもつ肥前狛犬は、佐賀県から福岡県の肥前狛犬にみられる特徴である。例として、私の研究室で遺失を防ぐ目的で佐賀県内の古美術店から入手した肥前狛犬も、この特徴を具える（図 2-5）。中国石獅でのこの種の表現は、石獅が端正な蹲踞の姿勢をとる際に、筋肉の表現として現れ、北魏（386-534）の石獅（上海博物院所蔵）に横三段線の表現がある（図 2-6）。

この種の表現は蹲踞姿勢をとる「蹲獅」（漢語：CunShi・ツンシー・ソンシ）にみられ、唐初の永康陵（唐の開祖李淵の祖父の李虎の陵）の石獅（武徳元年〈618〉）は、唐代（618-907）の陵墓獅子の先駆で、端正な「R」の字形の体型である（図 2-7）。

この「R」字形の体型は、北周（556-581）の蹲獅の姿勢にもみられる。

たとえば、西安碑林博物院所蔵の黄花石製の蹲獅もその種の姿勢をとる（図2-8）。総じて端正に蹲踞させる姿勢は、北朝系の石獅の典型的な表現であり、北朝後期の北周・北齊（550-577）の石獅に完整された形態をみる。唐代の石獅も、北朝系の石獅の表現を継承し、静態的で荘重な蹲踞型石獅が主流となる。これが肥前狛犬にみる横三段線の表現の源流といえる。

### 3. 脚部の筋骨表現

榑田神社（神崎市）の狛犬（年代不詳）は、脚部の筋骨表現や阿形の横U字形の口などに中国的な形の面影がある（一般的な肥前狛犬と違い、呷形の方が阿形より大きい）（図2-9・10）。杵島郡白石町の妻山神社の肥前狛犬は、前足先端に線刻表現があり、この種の筋骨表現と思われる（図2-11）。初期の肥前狛犬の形態に影響を与えたとされる小城市の圓通寺の木造神殿狛犬（天文九年〈1540〉）は、左右脚部付け根の筋肉が大きく膨らみ、腿が前面に押し出され、脚部の先端部に筋骨の線刻があるかにみえる（図2-12）。

足に筋を入れる事例は、北魏の雲崗石窟の護法獅子像にすでにみられるが、北朝の獅子像では特に北周の獅子像に顕著である。天和二年（567）の楊連照造仏像（西安市碑林博物院所蔵）の台座上の右獅子は、浮彫であるにも関わらず珍しく脚部を彫り貫き、脚部の筋骨表現が明確だ（図2-13）。則天武后と高宗の合葬陵の乾陵（唐・光宅元年〈684〉）の蹲獅は、中国北方の北朝系の獅子像に定着した脚部の筋骨表現がみられる代表的なものである（図2-14）。

ただし、脚部の筋骨は実際のライオンにもあり、ライオンが実在する地域には写実的な筋骨がライオン像に表現される。インドライオンの棲息するインドでは、紀元前3世紀のアショーカ王柱、たとえば著名なサルナートの柱頭のライオン像の脚部に筋骨表現がある（図2-15）。

#### 4. 獣口上部の「人」字型表現

肥前狛犬には、幾つか「人」の字型に上唇が広がるものがある。17世紀前後の早期の肥前狛犬からみられる表現である。銘から年代が判断できる最古の肥前狛犬で、天正年間（1573-1592）の奉納である熊野神社（相知町）の肥前狛犬は、上唇の形が「人」字形である（図2-16）。

「人」字形の獣口上部の表現は、実物の虎やライオンなど、ネコ科の動物の上唇の形に由来する。したがって、中国の石獅でも早期にみられる。中国では、後漢（25-220）の獅虎像にこの「人」字形の獣口上部がある。西安の碑林博物院には、後漢の優美な体格の無翼の獅虎像があり、早期の表現に挙げられる（図2-17・18）。

朝鮮半島では、統一新羅時代の元聖王陵の石獅（大韓民国慶尚北道慶州市・8世紀末）は、胸を張った唐朝の蹲獅の様式である。唐朝蹲獅の影響を受けて「人」の字型の獣口上部をもつ（図2-19）。

日本では、当麻寺曼荼羅厨子の脚部台輪上の獅子像が、人字形の獣口上部の表現があり、新羅獅子像の影響とみられる（『日本の美術』No. 279「狛犬」）[伊藤 1989 : 41]（図2-20）。

#### 5. 肥前狛犬の顔面の皴・髭

肥前狛犬の特徴の1つに、顔面の皴ないし髭にみえる線刻があり、考え方によっては、髭とみなすことも可能と思われる。典型として、新北神社（にきたじんじゃ・佐賀市諸富町）の肥前狛犬を挙げる（図2-21）。

髭の表現は、早期の熊野神社の肥前狛犬にもみえ、左右各3本の線刻がある（図2-22）。肥前狛犬の顔面の線刻は、鼻筋から左右に3本ずつ彫られるものが多い。なお、肥前狛犬とは一線を劃した大きな体型である神崎市冠者神社（かんじゃじんじゃ・千代田町）の狛犬も左右に3本線の髭の線刻がみられる（図2-23）。

福岡県でも3本線の髭の線刻をもつ狛犬が多い。たとえば、古賀市の古賀神社の狛犬(大正六年<1917>)がある(丸岡一政氏のご教示による)(図2-24)。

中国では、北周期の張子造仏立像(北周大象二年<580>)の仏像足元両脇の獅子などが典型で、細かな髭の線刻がある(図2-25・26)。中国北方の石獅には、この種の髭の線刻がみられ、北京型石獅では左右3本ずつの髭となる。例として、江蘇省用直鎮(ろくちよくちん・蘇州市吳中区)の「望柱」(漢語:WangZhu・ワンチュウ・ほうちゅう・欄干)石獅を挙げる(図2-27)。古賀神社の狛犬の3本髭は、北京型石獅の髭の表現の影響があるかもしれない。

肥前狛犬の顔面の皺が何を表したものは、なお検討の余地があるが、髭の線刻表現が過剰化したとする見方もあろう。ただし、有名な久留米市水天宮の肥前狛犬(いわゆる「撫で狛犬」で、自分の痛いところを撫でれば、その痛みが取れるという)は、髭とは思えぬ顔全面に段々をもちつつ広がる線刻で、髭よりは体毛を表現するかもしれない(図2-28)。同種の顔全面に至る線刻表現は、厳木町白山神社の肥前狛犬(正徳三年<1713>)(図2-29)や長崎市内の大型肥前狛犬の体裁をもつ「ししこまさま」などにもみられる(図2-30)。なお、白山神社狛犬もししこまさまも同様であるが、肥前狛犬には、阿形のみ髭状の線刻があり、吽形には線刻がないものが多く、髭・皺の有無で性格を分けるようだ。肥前狛犬は阿形が大きく、吽形をやや小ぶりに造ることが多く、造りの大小とともに、あるいは雄雌の違いの表現かもしれない。

なお、肥前狛犬になく、他地の狛犬にある中国伝来の特徴には、毛渦紋や仔付き・玉取りなどの特徴がある。毛渦紋はすでにペルシャのライオン像からガンダーラのライオンレリーフにもみられ、田辺勝美氏の論考に詳しい(図2-31・32)。仔付き・玉取りは、中国で北宋期(960-1127)には対偶化するが、日本に伝来した宋風獅子の特徴の1つである(図2-33)。仔付き石

獅・石虎の源流をみると、上海博物院所蔵の南朝期（420-589）のものと思われる石獅像は、単体だが、仔付きだ（朱昌言氏寄贈）（図 2-34）。古くは四川省雅安市の後漢の有翼虎像に仔付きがある（図 2-35）。

### Ⅲ. シナ海海域圏の「向天眼」系靈獸像

シナ海域には、類似した形態の石造獅子・狗犬像がみられる。福建南部から広東省西部・海南省・広西壮族自治区から、ヴェトナム北部まで、上付きで斜め上方の目線をもつ、丸眼・楕円眼の獅子像・狗犬像が多い。肥前狛犬も地理上は、シナ海域の狛犬に属するが、これらの靈獸像は頭部の形態や全体の姿態は肥前狛犬とも相似する。

金門島と福建南部泉州市・廈門市・漳州市に掛けては、「石獅爺」（福建南部方言：QiuSaiYa・チウサイヤー・せきしや）（図 3-1）がある。広東西部では雷州半島に多く、海南・広西・ヴェトナム北部に掛けて「石狗」（雷州方言：QiuGau・チウガウ・せきく）と呼ばれる狗犬像がある（図 3-2）。石狗はヴェトナムでは「チョーダー」（Chó dá・漢字表記：「狗石」）と呼ぶ。広東省は、東部恵陽市・中部肇慶市にも石狗が分布する。

沖縄の獅子像「シーサー」（ShiSa）・「シーシ」（ShiShi）（いずれも「獅子」の琉球語読み）では、村落シーサーにこの種の斜め上方を見る上付き眼のシーサーがある。村落シーサーにも様々な形があるが、上付き眼のシーサーは、たとえば島尻郡与那原町のシーサー群がある（新島地区と中島地区のシーサー）（図 3-3）。

以上のシナ海域の靈獸像の形態的特徴は、以下の特徴が挙げられる。ア. 円形・楕円形の目が上付きに斜め上方を向く。イ. 頭部の前方が断面状で、獣口が前方を向き、歯筋を格子状に揃えて彫った線刻をもつ。ウ. 背中が弧形を描いている。エ. 四肢の間が彫り貫きがない。

アの上付き斜め上方を向いた眼は、石獅爺の場合、「朝天眼」（漢語：Chao



TianYan・チャオテンイエン・ちょうてんがん) といい、「天を向いた眼」の意味である。そこで私は漢語・日本語共通の呼称として、「向天眼」と呼び、この種の石造靈獣像を「〈向天眼〉系靈獣像」と総称した。

向天眼系靈獣像の上記の特徴は、肥前狛犬も具える (図 3-4)。とくに、イ. 獣口が前方を向き、歯筋を格子状に揃えて彫った線刻をもつ点も、肥前狛犬にも通じる。

なお、シナ海域の靈獣像では、朝鮮半島に城門や村落を守る「石狗」(석구・SeokGu・ソック・せきく)がある (図 3-5)。削り貫きなしの四肢の形態は通じるが、全羅南道順天市の樂安城邑の石狗は、眼を円穴状に彫って表現し、向天眼系靈獣像ではない。

福建南部の石獅爺は花崗岩製で、設置目的は魔除けであるが、日本の狛犬や中国の一般的な石獅とは違い祭祀施設に1対で設置するのみならず、個人宅門前や屋根上に設置され、横丁・路地を単位とする風水上の鎮護や、村落の守護目的で祭祀される。

石獅爺の役割は、「路冲」(漢語: LuZhong・ルーチュン・ろしょう) 避けの役割でT字路の突きあたりに配置されることも多い。また、金門島を主として、村落の環境を守護する役割で、主に東北風や西風を鎮める鎮風の獅子像があり、所謂「風獅爺」(福建南部方言: FongSaiYa・フォンサイヤー・ふうしゃ) と呼ばれる獅子像もある (図 3-6) [川野 2016]。石獅爺の成立年代は、いずれも銘がなく考証が困難だが、明代初期の洪武二十五年 (1392) 頃の築城である金門守御千戸所城の北門に設置されたとされる北門外の風獅爺が最も古いとされる (図 3-7)。

なお、肥前狛犬にない中国石獅らしい特徴は、玉取り (例. 金門島金沙鎮東蕭村風獅爺) (図 3-8) や、首に宝石飾りの「瓔珞」(漢語: YingLuo・インルオ・ようらく) を彫るものがある (例. 金門島金沙鎮后浦頭風獅爺) (図 3-9)。背中の曲線は、肥前狛犬に多い4分の1円の緩やかさではなく、比較的急な曲線をもつものが多い。

石狗は、雷州半島では、単体で設置される場合と2尊1対で設置される場合がある。設置場所は、単体では村口・水口（村落に河川が流れ込む場所）・山腹・水辺・川辺・海辺に設置され、個人宅の門口・屋根上・壁面などに設置することもある。2尊1対では、廟堂や楼閣や墓所・巷口（路地の入り口）・個人宅門前での設置もある。

石狗の設置は、風水説が関わることが多く、T字路突き当たりの家の壁面や門前に設置し、直進する悪い気に対することが多い。個人宅の屋根上にも設置する。これらの点は、福建石獅爺とも使用・設置のあり方と通じる。また、石狗は、肥前狛犬にも通じて、鼻の左右に線刻があるものがある。やはり髭の線刻を簡潔に表現したものであろう（図3-10）。

石狗は銘がなく、石獅爺同様正確な年代鑑定が難しい。海南省海口市の明朝晩期の官僚海瑞（1514-1587）の墓所の石獅と石虎は、石狗と類似し、中国で一般的な石獅・石虎の形態ではない（図3-11）。すでに16世紀後半には成立していたと思われる。石狗は海南島と雷州半島では火成岩の玄武岩製である。この他、石狗は、狗犬を模したタイプや、中国で一般的な石獅に似た丸みを帯びた体格のタイプなどがあるが、狗犬を模すタイプは四肢に彫り貫きがない。

沖縄の村落シーサーは、沖縄本島南部八重瀬町富盛の大獅子（琉球語：UFuJiShi・うふじし）が1689年（尚貞王二十一年）に立てられ、最古のものである。村落の四方の方角などに設置されるが、邪鬼返しである「フーチゲージ」や火災予防である「火返し」である「ヒーゲージ」の役割がある。火返しは、風水（琉球語：FunXi・フンシー）上の火伏せの対策の意味があり、火災の原因となる「火山」（琉球語：HiSan・ヒーサン）に向けて設置されることも多い。材質は珊瑚質の石灰岩である。沖縄の村落シーサーも形態は多様であるが、向天眼系のシーサーは、長嶺操氏の『写真集：沖縄の魔除け獅子』を通覧しても沖縄本島南部糸満市や南城市の玉城地域や大里地域、与那原町、中部の西原町や本島中部近くのかつて離島であった伊計島

(うるま市)などにみられ、村落シーサーの相当数がこの系統である [長嶺 1982]。与那原町のシーサーを例にとると、特徴は他の地域の向天眼靈獣に比べて、像高 1 m 前後で比較的大型である。眼は円形で大きく、鼻は明確で大きく隆起し、鼻穴も 2 個開け、口は牙や舌の表現がなく、歯並びは格子状に揃い、正面から側面にまで回る。石材に合わせて長く伸びた前足の処理も、向天眼系靈獣像に共通した特徴である (図 3-12) [長嶺 1982 : 90-91]。

なお、向天眼系の獅子像は、福州開元寺の宋代とされる石獅や (図 3-13)、潮州開元寺の同時期と思われる石獅にもみられ (図 3-14・15)、大概宋代には出現していたと思われる。

#### IV. 結論——肥前狛犬の「向天眼」的特徴

斜め上を見る上付きの眼「向天眼」は、肥前狛犬の容貌のなかで大きな特徴をもつが、この目付きは杏仁形や円形の眼をもつ肥前狛犬の特徴とともに、木造神殿狛犬とは相違する。一般に木造神殿狛犬は、主に直視する視線で作られる。

頭部全体も、向天眼系靈獣像は、顔の上面に両目があり、口先が突き出し、前方に断面となり、揃った歯を上下に整列させる共通点があり、南シナ海の石狗と東シナ海の石獅爺・肥前狛犬とも類似した形態的特徴である。

肥前狛犬が出現した 16 世紀晩期は、中国や日本の各勢力集団が後期倭寇として東シナ海を往来していた。そのため、16 世紀以前には確立していたと思われる福建南部の石獅爺の形態が影響する可能性はあろう。ただし、この点は確証がない。たとえば、石獅爺はほぼ花崗岩製であって、肥前狛犬は安山岩製が多く、肥前の石材を使い、東シナ海沿海部に多い花崗岩製の肥前狛犬は、現代に製作されたものを除けば皆無である。

肥前狛犬の原型を海外に求める見方は、中野高通氏の御教示によると、若杉慧氏や坂田健一氏が朝鮮半島に求める [坂田 1978 ; 中野 2017]。また、加

田隆志氏は「肥前狛犬の概要」で、肥前狛犬の形態的起源が、最初期の相知町熊野神社の肥前狛犬が、松浦党の一族である鶴田上総介が奉納している点などから、中国南部・朝鮮半島である可能性を指摘する〔加田 2015〕。ただ、いずれも実例は提示されない。

私見では、朝鮮半島での肥前狛犬に類する向天眼系靈獸像同様の形態的特徴をもつ石像は、光州広域市楊林洞の官僚鄭淹（1528-1580）の孝行を顕彰する石碑を収めた碑閣（「孝子光州鄭公淹之閭」）脇の16世紀後半と推定される花崗岩製の忠犬像が確認できるが（図4-1）、類型はなさない。しかし、中国南部からヴェトナム北部にかけては、実際に類似の石造靈獸がある。

ただ、シナ海域のこの種の靈獸像は、石獅爺も南シナ海域の石狗も、沖縄の村落シーサーも、また向天眼系靈獸像ではない朝鮮半島の石狗も、風水説と密接な関わりがある。肥前狛犬は風水説との関わりはない。佐賀県内では、代わりに沖縄に多い「石敢當」（琉球語：IShiGanTou・いしがんとう、鹿児島方言：SetKanTou・せっかんとう）が、シナ海域共通の風水上の石造呪符としてみられる。

一方、肥前狛犬の形態的特徴は、福井県若狭地方の日引（ひびき）狛犬などにも類似した形態的特徴がある。飛騨地方の狼・山犬系の狛犬にも向天眼系靈獸像に類する特徴をもつ狛犬がある。丹後・越前地方の狛犬との関連を指摘する説は従来からあるが、ただし、日引石製や笏谷石製の肥前狛犬は皆無である。

しかし、神殿内設置の木造狛犬から石造狛犬への変遷上、上付きの眼となる過程がみられるなど、国内の小型狛犬のあり方から検討すべき点は多々ある。

肥前狛犬は、神殿のみならず、石祠など、室外に設置するという点から、材質も石材であることが望ましい。向天眼という特徴も、小型の石造物である石祠の左右に配置された場合、参拝者を迎える目線で製作すると、斜め上方を向いた目付になるのは、やはり相応の内在的な必然性が認められる。

肥前狛犬の東アジアでの位置づけを考察すべく、中国石獅とシナ海海域圏の向天眼系靈獸像からみた肥前狛犬の共通する形態的特徴を論じたが、本論で試みた広域的な比較的視座からのアプローチが、今後さらなる展開が期待される肥前狛犬のタイポロジー（類型論）的分析などの研究に資するならば幸甚である。

謝辞：本稿は、「肥前狛犬を学ぶ会」2017年度総会（5月28日、於、佐賀県小城市歴史資料館）での招待講演「中国石獅からみた肥前狛犬—各部の形態の特徴とシナ海の小型石獅・狗犬像から」を論文化したものである。取り上げた肥前狛犬の多くは、「肥前狛犬を学ぶ会」会長志佐惲彦先生・多久市歴史民俗資料館前館長西村隆司先生・肥前狛犬を学ぶ会役員の永淵秀治氏をはじめ、多くの「肥前狛犬を学ぶ会」の会員の方々のご案内・ご教示を受けた。とりわけ永淵秀治氏には貴重な資料のご提供と多くの狛犬のご案内を頂いた。同会の皆様には心より御礼申し上げます。

#### 参考文献

##### 〔狛犬一般〕

Foreign Languages Press, 2009, *Folk Stone Lions*, Beijing: Foreign Languages Press

荒俣 宏（著）・大村 次郷（写真）2000『獅子—王権と魔除のシンボル』東京・平凡社

伊東 史朗（編）1989『日本の美術』No. 279「狛犬」東京・至文堂

田辺 勝美（著）1993「ガンダーラ美術の獅子像のイラン的要素」『金沢大学考古学紀要』20号

李 芝崗（著）2014『中国石獅雕刻藝術』西安・陝西師範大学出版社有限公司

尤 廣熙（著）2003『中国石獅造型藝術』北京・中国建築工業出版社

##### 〔肥前狛犬〕

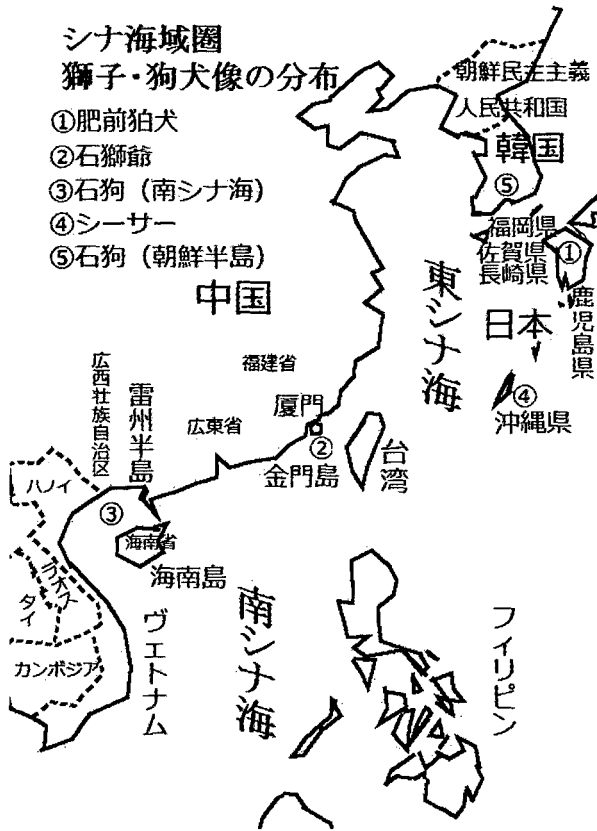
志佐 惲彦・厳木町教育委員会（編）1997『厳木町の肥前狛犬』厳木・厳木町教育委員会

坂田 健一（著）1978『ふるさとの石造美術—石造狛犬』久留米・久留米郷土研究会

西村 隆司・多久市郷土資料館（編）2011『肥前石造物の最高傑作—多久の肥前狛犬』多久・多久市歴史民俗資料館

西村 隆司・多久市歴史民俗資料館（編）2014『肥前石造物の最高傑作 再び肥前狛犬展—旧多久領の肥前狛犬』多久・多久市歴史民俗資料館

- 中野 高通 (著) 2017「九州肥前狛犬の世界」明治大学リベティーアカデミー講座「狛犬から眺める日本とアジア — 石の靈獸が結ぶ郷土の感性」第5回 (2017年7月6日) 講義資料
- 加田 隆志 (著) 2015「肥前狛犬の概要」『日引』第14号, 石造物研究会: 116-132頁
- 永瀨 秀治 (著) 2016「紀年銘のある肥前狛犬」『日本の石仏』No. 158 日本石仏協会: 30-35頁
- 武雄 てえ (著) 2016『肥前鳥居・肥前狛犬・狛犬 (獅子型)』福岡・私家版 [福建石獅爺]
- 川野 明正 (著) 2016「閩南地方大陸側の石獅爺・風獅爺 — 東シナ海・南シナ海 石造獅子・狗犬文化圏の比較研究(1)」首都大学東京人文科学研究科人文学報編集委員会 (編)『人文学報』No. 512: 1-26頁
- 陳 磅磅 (編著) 2013『台湾石獅図録』台北・猫頭鷹出版公司
- 陳 炳容 (撰文) 1994『金門風獅爺調查研究』金門・福建省金門県立社会教育館
- 陳 炳容 (著) 1996『金門風獅爺』台北・稻田出版有限公司
- 黄 紹堅 (著) 2015「独特的風獅爺 (修訂版)」  
[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_4b531f640102vn5w.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_4b531f640102vn5w.html)
- 三方創意工作室 (製作) 刊行年不明『風獅爺』(上・下), 刊行地点不明・三方創意工作室 (風獅爺トランプ)
- 楊 天厚 (著) 1998「金門風獅爺與瓦將軍」金門県福建省政府 (主編)『八十六年全国文藝季成果組專輯・金門風獅爺 — 村落的守護神・浯島不朽的傳奇』金門・福建省金門県政府: 22-29頁
- 楊 天厚・林 麗寬 (著) 2000『金門風獅爺與辟邪信仰』台北・稻田出版有限公司
- 楊 天厚・葉 鈞培 (著) 2009『守護的神祇 — 金門風獅爺與辟邪物』金門・金門県文化局
- [南シナ海の石狗]
- 陳 永生 (主編) 2012『雷州石狗』広州・嶺南美術出版社
- 林 濤 (主編) 2004『雷州石狗奇觀』北京・中国文史出版社
- 邱 立誠 (著) 2009「対雷州石狗文化的研究幾点認識」湛江市文化広電出版局 (編)『雷州石狗文化研究文集』広州・広東旅遊出版社
- 湛江市文化広電出版局 (編) 2009『雷州石狗文化研究文集』広州・広東旅遊出版社
- [沖縄シーサー]
- 長嶺 操 (著) 1982『写真集: 沖縄の魔除け獅子』具志頭・沖縄村落史研究所
- SHISA 編集委員会 (編) 2003『シーサーあいらんど』那覇・沖縄文化社



地図 シナ海域圏獅子・狗犬像の分布



図 2-1. 武雄市内小祠肥前狛犬（遺失）



図 2-2. 佐賀市大田神社肥前狛犬（右狛犬）

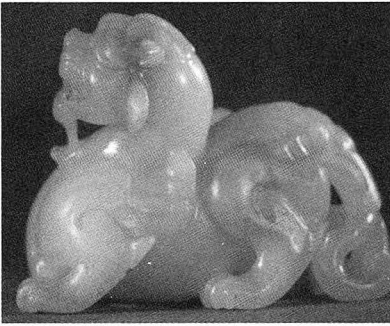


図 2-3. （前漢）涇陵出土獅虎像（蹲踞型）

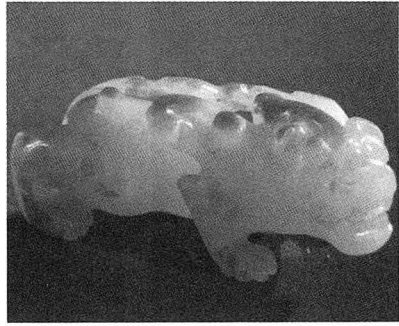


図 2-4. （前漢）涇陵出土獅虎像（匍匐型）



図 2-5. 明治大学川野研究室所蔵肥前狛犬

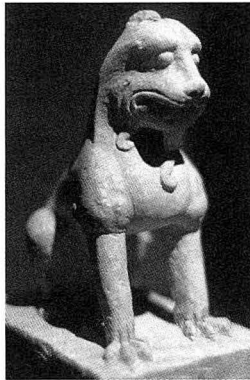


図 2-6. （北魏）小型蹲獅



図 2-7. （唐）永康陵石獅





図 2-8. (北周) 小型蹲獅



図 2-9. 神崎市櫛田神社狛犬 (吡形)

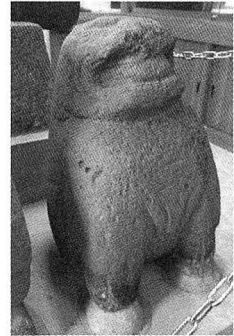


図 2-10. 神崎市櫛田神社狛犬 (阿形)



図 2-11. 白石町妻山神社肥前狛犬 (阿形)



図 2-12. 圓通寺木造狛犬 (吡形)



図 2-13. (北周) 楊連熙造仏像 (右獅)



図 2-14. (唐) 乾陵蹲獅 (左獅)

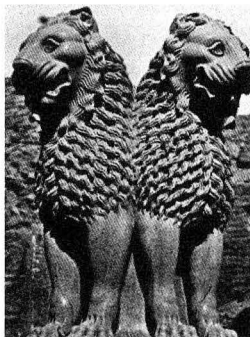


図 2-15. サールナート, アショカ王柱獅子像 (Wikipedia 画像)



図 2-16. 相知町熊野神社肥前狛犬 (吡形)

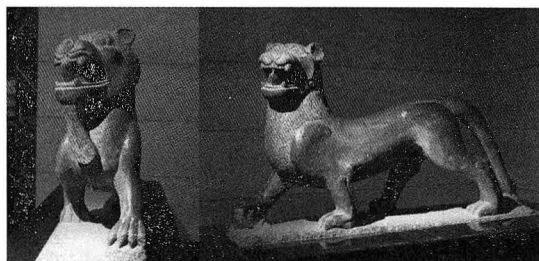


図 2-17. (後漢) 碑林博物院所蔵獅虎像 (左)

図 2-18. (後漢) 碑林博物院所蔵獅虎像 (右)



図 2-19. (統一新羅) 元聖  
王陵石獅



図 2-20. 当麻寺曼荼羅厨  
子獅子 (『日本の美術』No.  
279) [伊東 1989: 41]

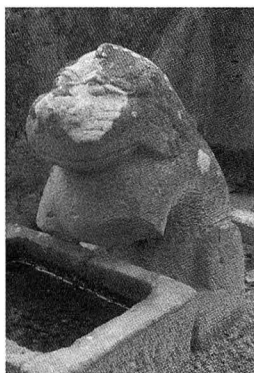


図 2-21. 佐賀市新北神社  
肥前狛犬

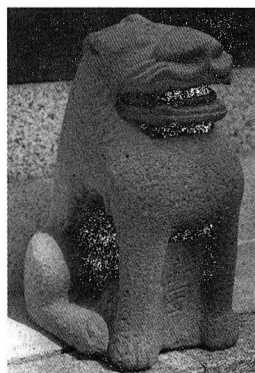


図 2-22. 相知町熊野神社  
狛犬 (阿形)



図 2-23. 神崎市冠者神社狛犬



図 2-24. 古賀市古賀神  
社狛犬



図 2-25. (北周) 張子造  
仏立像護法獅子 (右獅)



図 2-26. (北周) 張子造仏立像護法獅子 (左獅)



図 2-27. 用直鎮北京型望柱石獅



図 2-28. 久留米市水天宮肥前狛犬 (阿形)

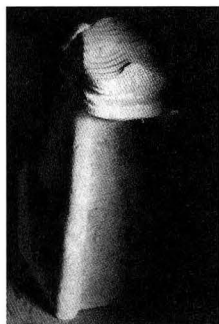


図 2-29. 巖木町白山神社肥前狛犬 (阿形)



図 2-30. 長崎市ししこま様 (阿形)

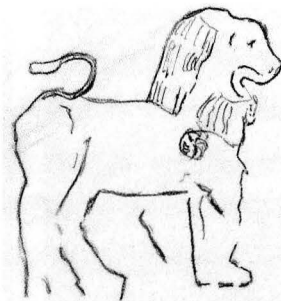


図 2-31. 台座側面毛渦のあるライオン像 (カーブル博物館) 所蔵・ショトラク出土・田辺論文より模写) [田辺 1993: 70]



図 2-32. 愛知県高浜市吉浜八幡社狛犬 (大正七年<1918>・石工名：内藤口吉)



図 2-33. 太宰府市観世音寺宋風獅子 (絵葉書)

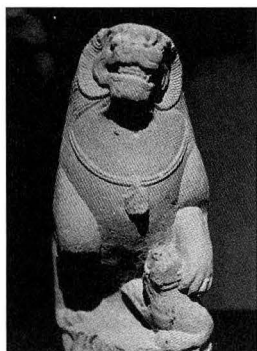


图 2-34. (南朝) 仔付き石獅 (上海博物院所蔵)

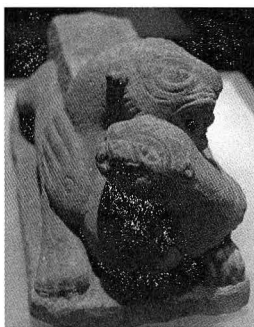


图 2-35. (後漢) 四川省雅安市出土有翼虎像 (四川博物院所蔵)



图 3-1. 金門金沙鎮何厝村石獅爺



图 3-2. 徐聞縣博物館所蔵石狗

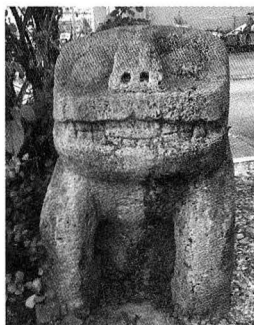


图 3-3. 与那原町新島シーサー A (中森あゆみ氏提供)

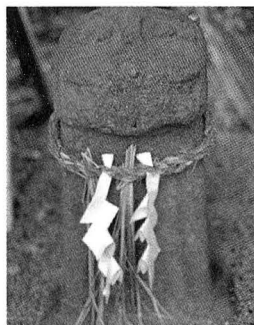


图 3-4. 佐賀市伊勢神社附社恵比須神社肥前狛犬



图 3-5. 韓国樂安城邑石狗

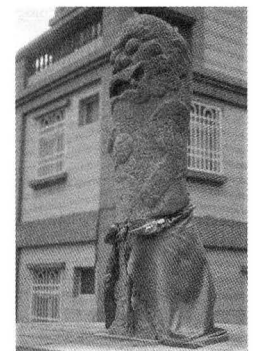


图 3-6. 金門金城鎮古崗村風獅爺

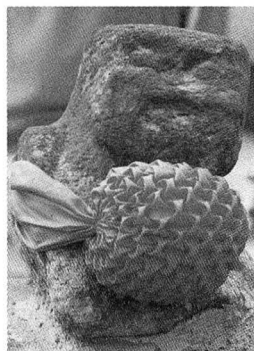


图 3-7. 金門金城鎮金門城北門外風獅爺

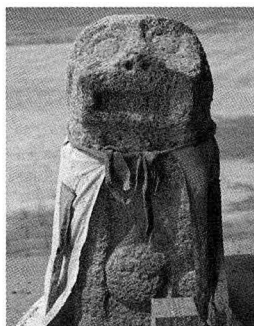


図 3-8. 金門金沙鎮東蕭村  
風獅爺



図 3-9. 金門金沙鎮后浦頭  
風獅爺



図 3-10. 湛江市博物館所  
藏石狗



図 3-11. (明) 海口市海瑞  
墓石獅

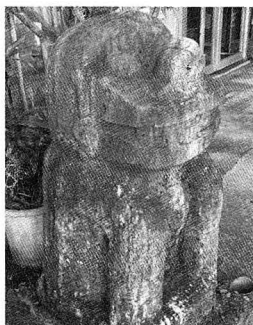


図 3-12. 与那原町新島シー  
サー B (中森あゆみ氏提供)



図 3-13. 福州開元寺石獅  
(左獅)



図 3-14. 潮州開元寺石獅  
(右獅)



図 3-15. 潮州開元寺石獅  
(左獅)



図 4-1. (朝鮮) 光州市鄭  
淹忠犬像